

犬の交通外傷239症例の評価

J Am Vet Med Assoc . 2009 Aug 15;235(4):405-8. doi: 10.2460/javma.235.4.405.

人医療では外傷患者に対する予後因子、危険因子として、高齢患者や傷害の重症度が高い患者が転帰が悪いとされている。獣医療において、外傷患者に対する予後評価に関連した項目は報告されていないため、タフツ大学に2001年に来院された犬の交通外傷239症例を年齢、基礎疾患、ATT Scoreに基づく重症度、受傷部位及び数を生存群と非生存群(死亡もしくは安楽死)に分けて調査した。また同時に入院期間および退院までの費用も調査した。

<結果>

- ・生存群は206頭、非生存群は33頭(内26頭は安楽死)であった。
- ・ATT Scoreの全体的な中央値は3(0-15)。生存群は中央値2(0-11)、非生存群は中央値6(2-15)であり、非生存群は生存群に比べ有意に高いスコアであった。
- ・ATT Scoreは受傷部位ごとの評価方法であるため当然の結果ではあるが、多発性外傷患者はATT Scoreが有意に高く、非生存群に多く認められた。また特に不整脈、腹腔内出血、腹壁ヘルニア、重度の軟部組織損傷、脊椎骨折が認められた患者は非生存群に多く認められた。
- ・若齢(149頭)、中年齢(68頭)、老齢(22頭)の年齢グループに分けられたが、年齢層での生存率に差は認められなかった。既往症の有無も生存率に関連しなかった。
- ・ATT Scoreと入院期間に相関は認められなかったが、ATT Scoreと退院までの費用には相関が認められた。

老齢犬の頭数が少ないため、年齢層による予後評価は再検討が必要であるが、ATT Scoreは外傷患者に対する予後評価として有用な指標である。